

レンズで迫る自殺者

スティール監督「ブリッジ」



「映像は脳裏に残る。映画を見て、自殺について議論をしてほしい」と語るスティール監督



「ブリッジ」から。自殺を止められた女性

37年の建設以来、約1300人が自殺したといわれる橋のたもとにカメラを構え、04年の1年間、橋の様子を見守り続けた。遠くから「傍観」し、時に風速レンズで追った。海面から66メートルの高さにある橋から24人が飛び込み、その一部を映し出している。

「自殺を止めなかったのか」「警察や橋の管理者の電話番号を短縮ダイヤルに登録し、不審とみれば通報する態勢を整えて撮影した」といふ。それでも、「多くは自殺者には内面の悲しみを表に出さず、兆候をさええづらぬ。それが問題を深刻にしている」と話す。水しぶきが上から落ちてくると、場面も多かっただけで、6人の自殺を止めたという。映画には、通行人が自殺をはかろうとする場面が複数ある。身元不明者以外約20人の遺族を訪ねて、話を聞いた。映画は、そうしたインタビューに長時間を割く。10代からうつと自殺願望に悩み続けた30代男性、自

遺族ら訪ね、心の軌跡追う

米国のゴールデンゲートブリッジから飛び降り自殺する人々を映したドキュメンタリー映画「ブリッジ」が6月16日から、東京・恵比寿ガーデンシネマなどで公開される。「自ら自殺を止めなかったのか」との批判から、上映を拒否する映画祭も出た。「見たくないものは見ない」という姿勢では、自殺を防ぐ（ヒト）も見落としてしまつ」と、エリック・スティーラー監督が語った。（高崎陽介）

と振り返る。「交通の往来が多く、それまで自殺が多発した場所を避けるのは、止めてほしい」という感情のかけらがあり、また、誰かどうつながり

たいというかすかな望みの現れではないでしょうか」と監督はみる。ヒューストン・賞受賞作を映画化したアンジェラの映画の製作をへて、今回が初監督だ。「作の手である前に、人間であることが大前提です。撮影対象に介入するべきかどうかなという作りのシレンスは一切なかったと強調した。

劇作家だけの異色劇団

29日から旗揚げ公演

劇作家14人だけが所属し俳優はゼロという異色劇団「劇団劇作家」（代表・篠原久美子）が、29日から6月3日まで東京・新宿ミラクルで朗読中心の「劇読み！」と題する旗揚げ公演をする。

篠原の呼びかけで昨年5月に発足。めいめいが書き下ろしを中心に作品を持ち寄り、合評・選考会を経て上演作を絞り込んだ。今回は8作を各2回上演する。

戯曲を読む俳優陣は、青年劇場、劇団罪座などから駆けつける。「戯曲の見本市のようなもの。新しい書き手を見いだす場、新進の劇作家が誕生する場にもなってほしい」と篠原。

死の床について女性の空想世界を描く佐藤喜久子作・関根信一演出「佳子のさくら」（29日、6月3日上演）は、東宝現代劇の面々が出演する。青木玲子は「宝物のような戯曲に出合い、ほれ込みました。商業演劇にはない小空間の芝居に関心がわく」。児玉利和

篠原久美子▶



児玉、青木、菅野(左から)▼



は「弁士のようなナレーター役。私の語りか劇を左右するような緊張感が楽しみです」という。菅野園子は「人が旅立つ瞬間に何を思うのか。普遍的なテーマをお客様に伝えたい」と話す。

演目はほかに「親シラス」「在り処」など。トークコーナーに別役実、永井愛、横内謙介、渡辺えり子がゲスト出演。各回2千円。劇団劇作家(080・6573・2242)。(米原顕彦)